

ずいそう



機械・産業遺産を巡る

溝口孝遠



私は人様にお話しできるほどの趣味は持ちあわせていないのですが、敢えて言えば、子供のころから考古学的な事柄や地理的な事柄に何となく興味を持っています。考古学は大変幅が広いと思いますが、文学的・文化的・民俗学的な歴史や古代ロマンに通じる領域も興味深いですが、技術を基にした産業の成り立ちに関わる事柄により関心があります。

一昨年より日本機械学会 関西支部のシニア会が開催する機械・産業遺産ツアーの世話役を仰せつかっています。これは、遺産的な価値がある機械・設備・構築物などを訪ねて、当時の技術を知り、どのような経過を辿って現在に至っているか、その栄枯衰勢を見て今後の在り方を考えることが目的です。見聞を広めるために、近畿産業考古学会にも加入させていただきました。

産業遺産とは何か、産業考古学とは何を目的として何をするのかの定義付けについては、専門家の間で色々と議論があるようです。その辺りの事は専門誌などにお任せしますが、産業革命で生まれた遺物が第二次大戦後の英国の経済復興とともに取り壊されて行くことに危機感を覚えて、価値あるものを残す目的で1974年に英国産業考古学協会が生まれたのが、系統的な取り組みの最初ようです。

産業遺産と言っても、橋梁、ダム、トンネルなど土木・建築構造物、社会インフラ設備、鉄道・道路、工場・プラント、機械設備・器具、医療機器、情報通信関連…等々、多岐にわたっています。日本にある世界遺産では、石見銀山と富岡製糸場が産業遺産に該当すると思います。

日本機械学会が指定している機械遺産は現在69件あります。土木・建設施工や産業用車両に関連するものとしては、コマツブルドーザG40（コマツ所蔵）、三池港水圧式閘門と蒸気式浮クレーン（三井鉱山所蔵）、内燃機関式フォークリフト（TCM所蔵）、油圧ショベルUH03（日立建機所蔵）などが指定されています。勿論、これ以外にも多くの機械遺産がありますが、産業遺産の中でも機械遺産に限ると、その探訪ツアーを企画するのは少々骨が折れます。

土木・建築・社会インフラ関係の遺産は元々数十年、百年単位の耐久性を持っており、現存するものが多い

のに対して、機械となると種類も多く、性能競争もあって、耐用年数が相対的に短く、現物が残っていることが少ないことです。更に、当時の技術・製品がどのような技術的背景の基に製造され、如何なる経過を経て現在の技術・製品につながっているか、歴史を語れる人や記録が少ないのが現実です。この状況にあって、当時の(社)日本建設機械化協会が2008年に発行した大川聰氏著の「写真でたどる建設機械200年」は大変貴重で、改めて敬意を表する次第です。

最近、訪問した例では、滋賀県犬上郡豊郷町にある龍が池・砂山池揚水機場の日本で最初の灌漑用動力式揚水ポンプがあります。揚水機場は土木学会の推奨土木遺産に指定されており、当時の蒸気ボイラ室跡や現在でも使用されている取水井戸などの構築物が残されています。機械屋にとってはそこで使用されているポンプに関心がある訳です。駆動用蒸気機関とポンプは豊郷町の八幡神社と廃校後にも保存されている豊郷小学校に地域の宝物として良好に保存されています。

銘板等によりますと、1910年に英国 Bedford の W. H. Allen Sons & Co. Ltd. で製造された遠心型ポンプです。英国より輸入された後、1910年6月には龍が池および砂山池で試運転され、1913年11月に竣工式を迎えています。同社は1880年に設立されたメーカで、1909年にはタイタニック号の蒸気発電装置を受注したようです。タービン、ポンプ、ディーゼルエンジン等を生産していましたが、1989年にはRolls-Royceの傘下となったようです。

機械遺産を訪ねていますと、人力、牛馬の力、水流や風など動力源を自然に任せていた時代から産業革命以後の蒸気、電気、ガソリンおよびディーゼル内燃機、原子力から再び自然の力を制御しながらエネルギーを確保する時代への流れ、動力を制御しながら目的とする作業を行う機構の進化を改めて感じます。また、明治のころの日本人の外向きの国際感覚と好奇心、追いつき追い越そうとする執念を感じ取れます。成熟した現代の日本の今後の在るべき姿を考える上でも歴史を振り返る重要性を認識する次第です。

訪問すべき機械遺産（出来れば近畿地方の）をご存じの読者がおられましたら、教えていただけると幸甚です。